



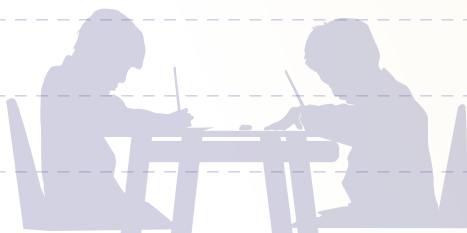
特集

# 「統一合判」 中学入試レポート vol. 1

## 2015年入試結果から探る 2016年首都圏 中学入試展望

皆さんの先輩にあたる受験生と保護者が、2015年の中学入試に親子で挑んだ2月から、すでに2ヶ月が過ぎた。今回は、新6年生になった皆さんが初めて迎える小6「統一合判」テストだ。前回1月11日の「統一合判」（5年生最終回）のときには、「2015年入試をしっかりと見据えて、親子で新たなスタートを！」と述べた。今回は、この2015年の入試結果から読み取ることができる、来春2016年入試の展望をお伝えしよう。

また、お子さんたちが来春2016年の中学入試を経て、それぞれが進学した中高一貫校から大学入試に挑む2022年には、大学入試のあり方が大きく変化している。その動きも意識して、わが子にとっての最良の教育環境を考えていただきたいと思う。



首都圏模試センター

## 保護者の意識の変化が目立つなか、 8年ぶりに受験生数が増加した 2015年の首都圏中学入試

2015年の首都圏中学入試が一段落して、すでに4月も半ばを迎えた。この記事をご覧ください。4月19日（日）「統一合判」の頃には、1～2月の中学入試を突破して、それぞれの志望校に進学した新中学1年生の皆さんとご家族が、満開の桜に迎えられた華やかな入学式を済ませ、新たな中学校生活に馴染もうと日々忙しく元気に過ごしているだろう。

そして、来春2016年の中学入試にチャレンジしていこうとする新6年生の皆さんにとっても、ここからが新たなスタートだ。

それでは、春の新たなスタートの時期に、今春2015年の中学入試の結果に見られた、いくつかの動きをご紹介していこう。

最初にお伝えしたいことは、今春の中学入試では、保護者の意識の変化が目立ち、これまでの中学入試とは少し違った動きが見られたということだ。

その象徴が、保護者の出願（志望校にわが子の入学願書を出す）の動きが非常にゆっくりと、慎重かつマイペースなものになったことだ。たとえば都内の私立中の願書受け付けが一斉に開始される1月20日の出願初日、この日に提出された各校の出願者数は、例年と比べて非常に少

ないものだった。

「このままだと多くの私学の受験生が大幅に減ってしまうのでは？」と思われたが、最終的に東京と神奈川の入試スタート日である2月1日前日の1月31日の夜には、ほぼ前年と変わらない出願状況となる私学が多かった。

おそらく今年の受験生の保護者の多くは、出願受け付け開始早々に、仕事の休みや半休を取ってまで、早くに願書を提出しようとはせず、自身のスケジュールのなかで、無理のない日を選んで願書提出に向かったということなのだろう。ここまでゆっくり（慎重）な出願ペースが目立ったのは、過去30年間で初めてのことだ。

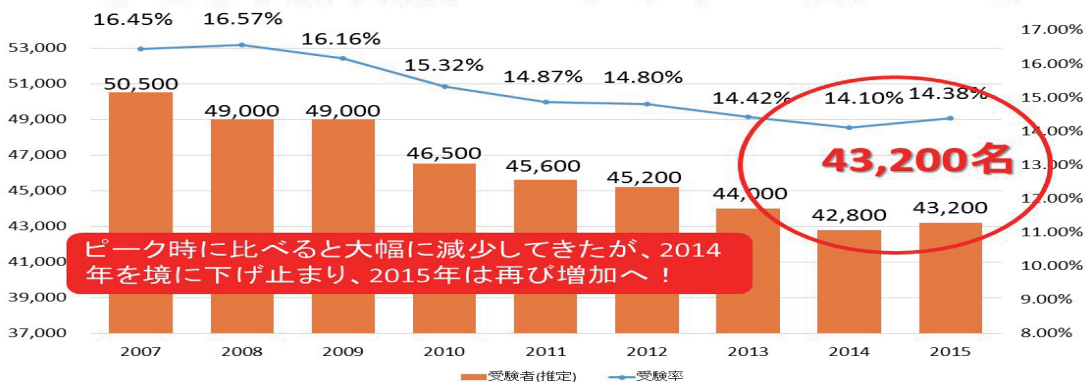
そうした慎重な出願の動きが多くなってきたことから、かえって2月1日入試校の受験率（＝実際の受験者／志願者）は例年より高まり、過去2年間は平均して「89～90%」程度だったのが、今年は平均で「92%」まで高まった。

こうした傾向のもとで、首都圏中学入試のメインステージである2月1日の実受験者数（午後入試を除く）は、前年よりわずかに上回り、約3万5千800人（推定含）が、この日午前中の入試に挑んでいった。

リーマンショックや東日本大震災の影響を受けて、2007年以来ずっと右肩下がり傾向にあった首都圏の中学受験生数は、今年なんと8年ぶりに（わずかながら）増加に向かったわけだ。

首都圏模試センターでは、この2月1日午前入

### ■ 中学受験者数は8年ぶりに増加へ！





試の実受験者の微増に加えて、この日の午前入試には挑んでいない（東京・神奈川以外の地域だけを受験しているケースや帰国生別枠入試だけを受験しているなど、別の形での）中学受験生が例年よりも数多くいたことを考え合わせ、今年2015年の首都圏中学入試の受験生総数を、前年の「42,800名」よりも400名多い「43,200名」と算出（推定）して公表した。

しかしそこには、個々の私学の志願者数の増減を見ていくと、求心力の強い（全体から見れば少数派の）私学が多くの人気を集め、それ以外の私学にとっては厳しい入試であったという側面もある。志願者を増加させた私学よりも、志願者を減少させた私学の数のほうが多かったということも事実だ。とくに神奈川エリアの私学や、東京・神奈川の多くの女子校には志願者の減少したケースが目立った。

その理由としては、以前から中学受験率が高く、私立中高一貫校の人気が高かったエリアで、従来のように2～3年間、進学塾に通って、しっかりと受験勉強を重ねてきた受験生が減少傾向にあることが考えられる。

とくに今年2015年の中学受験生（と保護者）は、2011年3月11日の東日本大震災をわが子の小学校2年の時に経験し、いろいろな意味で価値観の変化を余儀なくされた世代の家庭だ。それだけに、その後わが子の中学受験へのチャレンジの意思を固め、塾に通わせ始めた親と子は、よほど「強い意思」を持った受験生層であったに違いない。しかし反面、その数が以前よりやや減少したことは仕方のないことでもある。

しかし、そうした状況下でも、新たな教育のスタイルの導入などの学校改革や入試改革を打ち出し、求心力を強めることができた私学には、前年より多くの志願者を集め、難化するケースが多く見られた。

今春から共学化し、校名も変更して新たな学校に生まれ変わった、三田国際学園（旧・戸板）、開智日本橋学園（旧・日本橋女学館）、東洋大学京北（旧・京北）などの話題校が、予想を上回る大きな人気を集め、入試のレベルも高まったことなどが、その象徴だ。

そうした意味で、今春2015年の入試は、今後の中学入試の動向を予想するうえでも、大きな転機を迎えた入試だった。

### 保護者の教育への注目を喚起した「2020年大学入試改革」の方向性とそこで問われる新たな学力観・学習観

こうして中学受験者数の減少が前年の入試でいったん底を打ち、再び（わずかながら）増加に向かった背景には、やはり「保護者の意識の変化」がある。

そのひとつが、今年2015年の中学入試に挑み、4月から中学に入学した子どもたちが最初の当事者となる「2020年大学入試改革」に象徴される日本の教育改革の動きに、保護者が敏感に反応したということだ。

当初は2018年からとされていたが、現在の大学入試センター試験に替わる「新たなテスト制度の導入」となると、そう簡単なものではない。諸処の事情により、現在は「2020年」からの導入が目されるようになった。

この「大学入試改革」の概要については、前回の小5第5回「統一合判」の「解答と解説」冊子『GANBARE』の巻頭レポートでもご紹介しているので参考にしていきたい。

そして今年2月の中学入試シーズンの後（大学入試と合格発表のシーズン）には、この「2020年大学入試改革」がマスコミでも話題にされることが急激に増えてきた。



今年も男女5928名（昨年は5092名）という多くの志願者を集め、中学入試の最多記録を更新した米東中の1月10日A日程入試。

実は私学のなかにも、かつての大学入試改革の度に、進路指導や授業の現場が振り回されてきた経緯があるだけに、今回の改革の方向性や着地点を慎重に見極めようと、まだ自校の対応を明らかにしていないケースが多い。とくに現在の大学入試制度のもとで、高い合格・進学実績をあげている著名な進学校ほど、そうした慎重な姿勢が目立っている。

しかし、今春の中学入試では、その「2020年大学教育改革」の先にある、「今後のグローバル社会で求められる力」を明確に示し、自校の中高6年間の教育で育てていく新たな力と、そのために必要な教育の方向性や授業のスタイルを鮮明に打ち出して、保護者に伝えた私学が人気を高めたケースが目立った。

そのひとつの象徴が、最近よく耳にする「アクティブラーニング」というキーワードに集約される“新たな学びのスタイル”だ。

現在の中学1年生が高校3年生になる2020年は、東京オリンピック・パラリンピック開催の年。文部科学省はその年をターゲットイヤーと表現して、たとえば下村文科大臣は自身の著書で「そのときは10万人の中高生ボランティアが必要」と述べている。

この「50年に一度」の世界的なイベントを節目にして、東京を中心とした首都圏、さらには日本全体が、いま以上に大きなグローバル化の波に晒されることになる。その前後に、街も社会も教育も大きく変化することになるだろう。そうした今後の社会で求められる力を育てていくことが、現在の教育の課題であり、すでに5年後に迫った「2020年大学入試改革」と、それと一体型の『学習指導要領』改訂の狙いと解釈してよいはずだ。

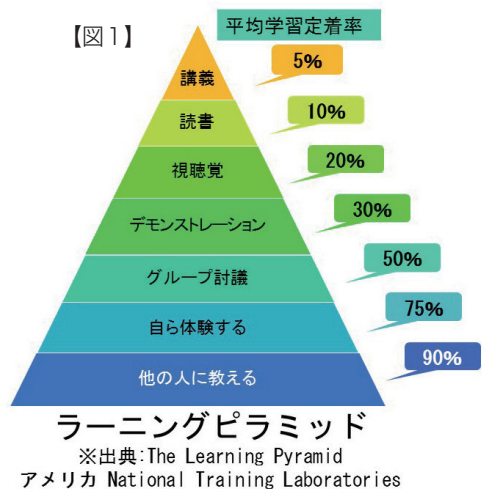
今回の「2020年大学入試改革」の狙いは、大まかな表現をすると「知識の蓄積を限られた時間で正確にアウトプットする力」を問う現在の（多くの）大学入試のあり方を、「得られる知識を使って、課題を発見～解決する思考力・判断力・表現力」を問う入試に変革しようとするものだ。

それは明らかに、明治期から今日まで受け継

がれてきた従来の「学力観・学習観・入試観」を含めた「教育観」そのものを大きく変えようとするものでもある。

たとえば、最近教育の世界で紹介されることの多くなった、アメリカ国立訓練研究所(National Training Laboratories)によって開発されたといわれる「ラーニングピラミッド」という、学習の手法と学習効果の関係を段階に分けて説明したモデル図【図1】がある。

そこでは上から下に向かうにつれて学習効果が高まる（%が上昇する）といわれている。講義をただ聞くよりも、討論したり、体験したり、学習者自身が教え合った方が学習効果は高まるという説だ。つまり学習者に主体性を持たせるほど効果的ということなのである。



こうした考え方を学習のスタイルに反映させたものが、先の「アクティブラーニング」であり、「PBL (Project-Based Learning = 課題解決型学習)」や「PIL (ピアインストラクションレクチャー) 型授業」、「双方向型・対話型授業」、「ICT授業」などと呼ばれる新しい学習スタイルを含めた、いわゆる「21世紀(未来)型教育」と表現される教育の手法だ。そしてそれらは、いま教育の世界でもうひとつの大きな話題となっている「IB (国際バカロレア) プログラム」も含めた「世界標準の教育」ともいえる。





こうした新たな「学びのスタイル」を、自らのめざす理想や教育理念と照らし合わせて、「本校は、今後の社会で必要とされる力を育てるために、こういう教育をしていきますよ」ということを、受験生と保護者に向けて広くわかりやすく発信した私学が、今春2015年の中学入試でも注目され、人気を高めるケースが目立ったのである。

### 現行の大学入試でも成果を伸ばし、 なおかつ今後の入試改革にも対応できる 「21世紀型教育」が人気を集めた

しかし、こうした新たな「学力観・学習観」は、まだ誰もが理解し、賛同しているというものではない。目の前に現在の大学受験に挑む生徒がいて、その生徒たちの夢や将来の目標の実現に向けて、希望の進路に進むための大学入試をクリアできる力を育てようとしている多くの先生からすると、「そういう学びで、果たして大学入試に対応できる力を身につけさせられるのか？」という疑問も生まれている。

一方では、従来の大学入試に対応する「学力観・学習観・入試観」の必要性も重視し、中等教育の時期における「努力して知識をインプットする」学習で身につけられる力や、そうした学習姿勢、自律心などを「やはり大切にすべき」だと考える（比較的年齢の高い世代の）保護者や教育関係者も少なくない。

現に今春の2015年大学入試では、また多くの私立中高一貫校が東大を筆頭にした難関国公立大学や、早慶などの難関私立大学への合格実績を大きく伸ばした。

これもまた、公立小学校からお住まいの地域の公立中学校への進学という既定の進学先を選ばず、あえて「中学受験」という選択をした多くの受験生と保護者の期待に、それぞれの私立中高一貫校が応えた成果に違いない。

今春も東京大学への合格者数の「トップ10」のすべてと「トップ30」のほとんどを国立・私立中高一貫校が独占しているし、今年も1～3名程度の東大合格者を出した中堅私立中高一貫

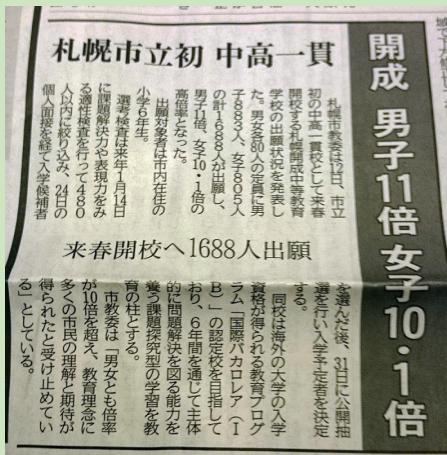
校の成果の躍進にも大いに注目すべきだろう。

しかし、よく見ると、こうして今年度の大学入試でも成果（合格実績）を伸ばした私学の多くは、先の「21世紀型教育」の要素を多分に取り入れ、すでに自校の授業でそれを実践してきた先進的な私立中高一貫校でもある。

たとえば東大への合格者の増加が目立った海城、渋谷教育学園幕張、市川などをはじめ、芝、

### 首都圏模試センターが選んだ 2015年首都圏中学入試 重大ニュース

- 1.三田国際学園の爆発的大人気
- 2.開智日本橋学園の大人気
- 3.新設の東洋大京北の大人気
- 4.栄東の受験者数またも史上最多に！
- 5.札幌開成（公立中高一貫校）に1,688名応募
- 6.東京都市大付属の御三家併願者増加
- 7.開成・麻布・桜蔭など最難関校の応募者増
- 8.適性検査型入試の拡大（1000→2000→3000名）
- 9.私学の英語入試実施校の増加
- 10.帰国生入試応募者数の増加
- 11.マイペース出願開始!?
- 12.横浜英和女学院人気→青学大進学に期待
- 13.聖学院・昨年に引き続き人気増
- 14.「21世紀型教育を創る会」校の受験者増
- 15.麗澤の出願数倍増（実数は一割増）
- 16.偏差値的に低い学校も応募者増
- 17.サンデーショック
- 18.都市大付④ 2/6は大雪で午後入試に
- 19.中村中では「対話型説明会」開始
- 20.ついに「出願者ゼロ」の学校も…



2014年12月14日北海道新聞（夕刊1面）より

暁星、洗足学園、鷗友学園女子、立教女学院、栄東、かえつ有明など、先進的な教育のスタイルを導入している多くの私立中高一貫校が、それぞれ各私学オリジナルの「21世紀型教育」的な探究・体験・調査・研究・発表・グループ（協同）学習などで育てた力を生かして、現在の大学入試でも成果を発揮しているのである。つまり、先ほどの「そういう（新しい）学び（のスタイル）で、果たして（現在の）大学入試に対応できる力を身につけさせられるのか？」という疑問の明快な答えがここにあるということだ。

おそらく、こうした私立中高一貫校は、来年以降（2019年まで）の現行の大学入試制度のもとでも確実に力を発揮し、さらに成果を伸ばしていくことだろう。そしてその先の2020年以降には、新たな大学入試における成果を、当分の間リードしていくことになるはずだ。

**従来とは違ってきた保護者の価値観が、わが子の学校選びにも反映されて、「偏差値を飛び越える」併願が出現**

そして、もうひとつ今年の中学入試で目立った「親の意識の変化」として、これまで保護者にとって学校選びの非常に大きなファクターと考えられてきた大学合格実績（進路）についても、「大切なのはそれだけではない」といわんばかりに、従来とは少し違った視点や価値観で、わが子の学校選びをする（多くは若い世代の）保護者が増えてきたことがあげられる。

現在の中学受験生（＝小学生）の保護者の多くは、ちょうど40歳～45歳前後の世代。バブル景気が弾けた後に社会人となり、その後のリーマン・ショックや大震災の影響も重なっての長く厳しい不況下で生き抜いてきた世代でもある。

一部上場の大手企業の倒産や終身雇用制の崩壊など、それ以前の世代まで受け継がれてきた社会構造の急激な変化をつぶさに見て体験してきた現在の中学受験生の保護者の世代にとっては、「学歴（学校歴）」への価値観は、やはりかつての保護者の世代と大きく違っていても不思議はない。ことさら、わが子の難関（有名）大

学進学にはこだわらず、別の価値観や教育観で学校選びをする保護者が増えてきたといってもいいだろう。

そうした若い保護者の世代の意識の変化が、さまざまな意味で入試の動向にも反映されたのが、今年2015年の中学入試だった。

そのため、依然として高い入試レベル（偏差値）と、それとほぼ相関する高い大学合格実績を出している開成や麻布、桜蔭や女子学院などの難関校が、前年より多くの人気を集めたという傾向がある一方で、それとは逆に、まだ入試レベルはさほど高くなく（見かけの偏差値は低く）、大学合格実績も少ない学校であっても、教育のスタイルやめざす理想が保護者の価値観と一致した（新たな期待や好感を集めた）私学が、多くの人気を集める動きが見られたことも、この2015年入試の特徴のひとつといえるだろう。

そうした新たな保護者の価値観、学校選択の価値基準によって、「偏差値にとらわれず」「偏差値を飛び越える」ような、柔軟な学校選択をするケースも目立ってきた。

実際にそこで選ばれたのはどのような私学かというと、先ほどの「21世紀型教育」をすでに実践してきたり、あるいは今後、積極的に導入～推進していく教育姿勢・方向性を明らかにしたフレッシュな私学が多かった。

冒頭で触れた、今春の共学化・校名変更とともに、新たな（今後の「IBプログラム」の導入も含む）コース制を導入して注目を集めた三田国際学園や開智日本橋学園をはじめ、やはり「IB



共学化・校名変更の初年度から、全回の入試で男女のべ2120名（昨年は女子194名）となった三田国際学園中（旧・戸板中）の2月1日午後入試。



プログラム」の導入も含め、日本初の「ハイブリッドインタークラス」を新設した工学院大学附属、カナダの教育プログラムと日本の教育課程を並行して履修できる「ダブルデュプロマ」を導入した文化学園大学杉並、すでに帰国生を多く受け入れ、リベラルアーツと独自の感性教育をめざすかえつ有明、SGH指定校として成果をあげてきた順天、思考力セミナーやレゴブロック講座など体験型の授業と説明会が好感を呼んだ聖学院などが、そうした例といえるだろう。

そうした、いわゆる「21世紀型教育」と“世界標準の”学びのスタイルを標榜し、「子ども(生徒)自らが自発的・能動的に“楽しく学べる”授業のスタイル」を導入～実践しようとしている私学が、前年以上の人気を集めたことに、保護者の皆さんも注目しておくべきだろう。

### 新たな中学受験市場が生まれた、 この2015年を転機に 来春2016年入試は再び活況へ!

そして今春2015年入試では、そのほかにも従来とは違ったいくつかの動きが見られた。

その例としては、「英語入試の増加」や「私学の適性検査型(思考力型・PISA型)入試の増加」、「帰国生別枠入試の志願者の増加」をはじめ、「1月の千葉エリアにおける推薦入試の志願者の増加」、「千葉・埼玉・茨城・栃木など東京周辺エリアで地元の私学(だけを受験する)志向の増加」などがあげられる。



男女2739名(昨年は2692名)という多くの志願者を集め、さらに人気を高めた市川中の1月20日幕張メッセ入試。

### 今春2015年入試で拡大した新たな中学受験市場



さらには、数字からは見えにくいですが、それまでサッカーや野球、テニスなどのスポーツ、音楽、ダンス、バレエ、スイミング、絵画、習字、英会話や英才教室、能力開発教室などの「習い事」に力を入れてきた子どもたちが、6年生になってから、あるいは6年生の途中から個別指導塾などを通して中学受験をめざす「駆け込み受験(=習い事受験ともいべきか)生」なども、確実に増えていると見られる。

こうした新たな受験者層の増加が目立ち、従来からの主流であった(塾で受験準備をしてきた)受験生とは少し違った層、違った受験準備のスタイルを経てきた受験生が増加したことによって、私学の側でもそうした子どもたちの資質や家庭の教育姿勢に期待し、迎え入れるような形態の入試を実施しはじめたことから、「新たな受験市場が生まれた」のが、今年2015年の入試だったといえるだろう。

こうした新たな受験者層を構成する受験生の保護者は、先ほども触れた(概ね45歳以下の)若い世代。わが子の進路や学習環境について「これがよい」と親が決めつける以前に、わが子に「多様な体験をさせてあげたい」「子どもがやってみたくて望むことを応援(サポート)してあげたい」と望む、ミレニアル世代の親たちだ。そうした新世代の保護者は、家族で過ごす時間や、わが子が何かに夢中になって取り組む姿を見ることを喜び、そういう体験を強く願う世代でもある。難関大学への進学にこだわる意識はさほど強くなく、むしろ中高の6年間に、学習だけではなく、課外活動や行事、部活動なども含めて、学校生



活全般で「多様で豊かな」体験をわが子にさせたいと願う傾向の強い保護者といってもいい。そして、こうした家庭には「心の教育」も大切に考える親が多い。

こうして今春の2015年入試に「保護者の意識の変化」と「新たな中学入試市場」が生まれてきたことは、そうした世代の保護者の家庭から、子どもたち（中学受験生）を迎え入れる私立中高一貫校にも、やはり意識の変化を促すことになるだろう。

すでに現実のものとなった「英語入試の増加」や「思考力入試（適性検査型入試）の増加」をはじめ、従来の受験準備のスタイル（2～3年塾に通って受験勉強をしてきた）とは違った準備スタイル（スポーツや音楽などの「習い事」に打ち込んで、小6になってから、あるいは小6の夏以降から中学受験をめざし、短期間の塾通いや個別指導など）で準備をしてきた多くの小学生（＝いわゆる「駆け込み受験生」）に向けて、さらに門戸を広げる（新たな中学入試の形態を設ける）私立中高一貫校も増えてくることが予想される。

さらに生まれた時からPCやゲーム、インターネットに接してきた「デジタルネイティブ」と呼ばれる世代の子どもたちは、それ以前の世代とは違った感覚やスキル、情報収集力を持ち、新しい価値を生み出せる感性や可能性を秘めている。いま教育の現場で注目される「ICT活用」も、まったく自然に、自分たちの学びのスタイルとして馴染めるのが、現在の子どもたちだ。



男子にとっての、最難関の私立でありながら、今年も1222名（昨年1186名）と志願者をさらに増加させた開成中の2月1日入試。

そうした新たな可能性をもつ子どもたちを迎え入れる形態の入試に向けて「多様な受験準備のスタイル」で挑んでいく小学生が増える一方で、2～3年塾に通ってしっかり力をつけてきた従来型の受験生が依然として中心となっていくことで、今後の中学受験市場は、さらに多様性と多くの選択肢を併せもつ、活気あるものになっていくことだろう。その結果、中学受験に挑む小学生数が今年以上に増えることも十分に考えられる。

そして、この「多様化」傾向は、多くの私立中高一貫校にとっても望ましいことだろう。

「2020年大学入試改革」の狙いのひとつに、大学の個性化・多様化があるように、入試の形態が多様になることで、それぞれの教育内容や学びのスタイルも理解し、それを受験生と保護者が上手に選択してくれるようになれば、そこでは、単なる「大学合格実績による学校選び」や「偏差値による学校選び」は、数ある選択指標（価値基準）のひとつに過ぎなくなり、もっと個々の私学の教育内容の差異や、多彩な成果、校風・カラーが、受験生と保護者の意識のなかでクローズアップされることになる。

そうした時代の変化と、変わる日本の教育の節目を迎える子どもたちの世代のために、「わが子にとって最良の進路」を探し、選んで、その学校への入学のパスポートを得るために親子でチャレンジしていく中学受験。

すべての中学受験生と保護者が、そこで「わが子にあった」学びの環境を得られることを、今年も心からお祈りしたい。



女子にとっての、最難関の私立でありながら、今年も655名（昨年514名）と志願者を増加させた桜蔭中の2月1日入試。